

## 陶淵明「形影神」を読む

邊 土 名 朝 邦

### はじめに

顧みるに古今東西、影をモチーフとした文学作品、哲学的思索は枚挙にいとまないほど存在する。中国も例外ではない。陶淵明に五言詩「形影神」三首がある。淵明は己が身心の分身である形（身体）、影、神（魂もしくは精神）の対話を通して死生観を深く問うている。拙論はこの詩三首を検討して陶淵明が生と死をどのように考えていたかを少しく論究したい。

その前に「形影神」に大きな影響を与えた『莊子』齊物論篇の影と罔<sup>もつら</sup>兩との対話（寓言）を先行例として取り上げたい。

『莊子』の中で、多くの研究者が一致して莊周自身の著述と認めているのが、内篇七篇の中の齊物論篇である。『莊子』思想の中核をなす万物斉同説がいくつかの寓言を通して展開されている。福永光司はその万物斉同説につ

いて、次の概括している。

「人間はまた自己の最大の惑いを、自己（我）と他（物）との対立の中に見出す。美しき彼と醜き己れ、富み榮ゆる彼と貧しく疲れたる己れ、あるいは受け容れざる社会を呪う。富と貧、貴と賤、栄と衰、賢と愚、大と小、美と醜など、現実社会における在り方と価値づけがその心を激しく揺さぶり、貧窮、孤独、汚辱、敗亡がその心を痛ましく打ち挫ぐ。」（『莊子』内篇ちくま学芸文庫）

しかし、絶対者は、その惑いとこの懼れとを超越するのである。彼は生と死、物と我の対立をその根源において一つとする。生と死が一つであり、物と我が一つであり、是と非とが一つであり、可と不可が一つである。「道」——真実在——世界に立つことが莊子の超越なのである。

万物斉同の深遠な哲理を分かりやすく説くために用いている寓言の中で特に有名なのが天籟、地籟、人籟の比喻である。

これは斉同の理を大悟した南郭子綦とその弟子の顔成子游の対話の中に出てくる。子綦は言う。そもそも大塊の噫気（天地の吐き出した息）が風である。一旦大風が吹くと樹木、岩・山のあらゆる窪み、洞穴が一斉に激しく鳴りひびく。例えば交響楽団のあらゆる楽器が同時に演奏されたようなもの。これが地籟である。地籟が分かれば人籟はたやすく理解できる。人間が息を吹きこんで笛や尺八を鳴らすことである。さて、だとすれば天籟とは何か。つまり地籟・人籟を包摂して万物とその作用をかくあらしめている一者ということか。無限数のドミノゲームを想起されたい。万物はある一点に力が加われば、おのづから無限のドミノたおしのような現象が起る。無限の中の起点。それはどこに在るのか、それは絶対無なのか、そこではおのづからがみづからになる。時間も空間も無限に

とれば、のつべらぼうになる。仏教で言う依他起性<sup>(2)</sup>である。

依他起性を念頭におきながら、影と罔両の対話の寓言を考えてみよう。罔両はモウリヨウ、疊韻の語で、郭象は景(影)外の微陰だと注している。影の影とは奇抜な着想である。

罔両、景(影)に問うて曰く「曩に子は行き、今は子止まる。曩に子は坐し、今は子起つ。何ぞ其れ特操(主体性)無きや」と。景曰く「吾は待つ(依存するもの)有りて然る者か」。

つまり影は形があるからこそその存在である。その形もまた何かに依存している。その何かもまた別の何かに依存している。

「吾が待つ所もまた待つ有りて然る者か」

依存は無限に続く。だから分からないとしか言いようがないのである。

悪ぞ然る所以を識らん。悪んぞ然らざる所以を識らん。

言語(名辞)による思考を停止するのが賢明なのである。成玄英の疏で、(形)・影・罔両は「独化(ひとりでいなる)だとして、次のように言う」。

影の待つ所は即ち是れ形なり。若し影をして形に待たしめば、形は造物に待つ。請い問わん、造物は復た何をか待たんか。斯れ即ち無窮に待つを待たん。卒に待つ無きなり。

結局、無限のドミノだおしでは、依存するとか依存されるという関係に帰するのである。(ひとつの撥撫である。造物主という絶対者の存在を問うこと自体が無意味となる)

## 一 影と形の間答

形・影・神三首の制作年代は淵明の詩文を系年排列した王瑤の『陶淵明集』（一九五六年作家出版社のちに一九八三年人民文学出版社）が今のところ、最も説得力をもつと思う。王瑤によれば、これら三首は東晋安帝の義熙九年（四一三）淵明四九歳の時に作られたとする。東晋最大の仏僧慧遠（三三四～四一六／七）は廬山にこもり念仏結社（のちの白蓮社）をつくる。四〇三年、潯陽の三隱の劉遺民は官を棄てて廬山に隱遁。翌年、慧遠「形尽神不滅論」を執筆。のちに潯陽の三隱の周統も入信。義熙九年に慧遠は「万仏影銘」の文を作成。この影銘に「廓たり矣。大象。理玄名無し。神を体して化に入り、落影、形を離る」とあり、これに触発されて「形・影・神」三首は書かれたとする。ただ筆者は淵明が「万物影銘」が発表されて、すぐに読んだかどうか不明なので二、三年の幅をもって見た方がよいのではないと思う。潯陽の三隱でただ淵明だけが慧遠に帰依しなかった。それからもう一つ注目したいのは淵明の身边で親族が相次いで亡くなっていることである。田部井文雄・上田武『陶淵明全釈』（明治書院）の「年譜」などでは、三七歳に実母孟氏の喪に会い、四一歳で程氏に嫁した義妹の訃報に接している。その三年後の義熙三年に程氏妹の祭文を書いている。その翌年六月に火災に遇い舟に一家仮住まいをしている。四六歳に潯陽城外の南村に転居。その翌年に従弟敬遠が三二歳で死去した。淵明「祭従弟敬遠文」を作っている。義妹と敬遠との祭文は哀切きわまりない。ここ十年間、淵明にとってまことに多事多難であった。

### 「形影神」の序文

貴賤賢愚、當當として生を惜しまざるは莫し。斯甚だ惑えり。

つまり、人間である以上、誰ひとりとして生きることにあくせくし、死を恐れない者はない。私（淵明）は「形（肉体）」と「影」のおおのにその立場を述べさせ、「神」（精神）に自然の摂理（つまり生があれば必ず死がある）を説かせ、「形」「影」の惑いを解消させることにした。

故に極めて形と影の苦しみを陳べしめ、神をして自然を弁じて以て之を釈かしめんとする。

この序のしめくりとは、「好事君子、共取其心焉」（好事の君子其の心（主旨）を取れ）「神不滅」を説く仏教徒に挑発的な口吻でむすんでいる。

形が影に贈る言葉は次の通りである。

天地は長えに没せず。山川は改まる無し。

草木常理を得て、霜露之れを榮悴せしむ。

人は最も靈智なりと謂うも、独り復た茲くの如からず。

箇々世の中に在りと見るも、

奄ち去て帰期靡し。

天地、山川草木それぞれが定まった法則があるのに万物の靈長といわれる人間だけがそうではない。たまたまこの世に生を受けているのに、たちまち死し去って再びこの世に帰ってくる時がない。流転さわまりない。

奚ぞ覺らん一人無きを、親識も豈か相思わんや。

人ひとりが亡くなったことを誰も気づかない。親戚や友人ですら亡くなった当初は悲しむかも知れないが、やがて忘れられてしまう。

但だ平生の物を余すのみ。目を拳れば、情は悽洒たり。

使つていた日用の品々が後に残っているだけ、あたりを眺めて悲しくなるばかり。

我に騰化の術無ければ、必ず爾らんこと復た疑わず。

願わくば君（影よ）吾が言を取り、酒を得なば苟しくも辞すなかれ。

昇天して不死の仙人と化す術も会得してないので、どうか影君、私の言い分を酌み取つて酒が手に入ったら、ゆめゆめの辞退しないでくれ。

形（肉体）の死生観、好きな酒の欲望など、今日の我々と同様現実的で、享樂的ですからである。

さて、形に対して、影はどう答えるか。

生を存するは言う可からず。生を衛るすら毎に拙なきに苦しむ。

「存生」は『莊子』達生篇の「世の人以為らく、形を養えは以て生を存するに足ると」に基づく。「衛生」も『莊子』雑篇、庚桑楚篇に依っている。

誠に崑華に遊ばんことを願うも、貌然として茲の道絶ゆ。

私として崑崙山や華山のような仙界にでかけたいと願うのだが、はるか遠くどこにあるやら。道は閉ざされている。

子と相遇うてより来かた、未だ嘗て悲悦を異にせず。

蔭に憩えば暫く乗るが若きも、日に止まれば終に別れず。

日陰に憩うときはしばらく離れるが、それ以外は、形よ、あなたとずっと一緒、悲しみも喜びもともに分かち合っ

てきた。

形が影に訴えるのは、我々から見ればちよつと可笑しい。木陰に身をおけば影は消える。形が何らかの工夫、例えば光源を形の前に据えれば影はたちまち消え。形は依存される主体である。ところが影の方がカウンセラーになつてゐる。形の方が何か影に後めたい思いを感じてゐる。ここで想起されるのが『莊子』漁父篇である。孔子を説教する漁父の話しに出てくる愚人の寓話である。この男は自分の影をこわがつており、また自分の足跡をいやがつてゐる。男はこれらを嫌がつて走つて逃げず。ところが影も足跡も自分も体から離れない。走り方をいやがうえに足を速め、ついに力尽きて死んでしまふ。この寓話が淵明の念頭にあつたのではなからうか。

さて「形・影・神」の影は形に向つて、いづれあなた消滅すると仄めかす。

此この同どうは既に常じょうなり難がたし。

あなたが滅めつびれば私わがも消える。

善ぜんを立たつれば遺あ有らん。胡こぞ自みづから竭つくさざる可べけんや。

『易経』文言伝に「積善に／余慶有り」とある。立善は淵明がよく使う言葉である。仏教の因果応報の謂いではない。明らかに名教を重おもじる立場の言である。

酒は能よく憂うれを消くすと云いうも、此これに方むかふれば詎なぞ劣せらざらん。

酒を飲めばたしかに一時的には悩みは解消されるが、それに溺れたら体を壊す。立善に比べたら、なんとも拙劣ではないか。影は倫理家であり禁欲主義者である。さて形は影の訓戒に納得しただらうか。否である。となれば、両者を調停する第三者が要る。神の登場である。

## 二 神釈

「形贈影」と「影答形」が共に一六句であるのに対して、「神釈」が二四句である。第三首に淵明が力をこめたがよく分る。

太鈞は力を私するなく、万里自ら森として著わる。

太均とは万物の造化主。万物をわけへだてなく、それぞれ独自の形で造り出す。万物にはおのずから必然の道理が備わっている。人間が三才の中となるのは「豈に我を以ての故ならずや」。造物の一つである人間、それは天地の間、中央に位置し、最も霊長なる存在として天地とともに万物を化育する。三才の語は『易経』の説卦伝に見える。人間が主体として知・情・意を働かせて活動するには、他ならぬ私（精神）が存在するに他ならない。

一人、三才の中と為るは、豈に我を以ての故ならずや。

君らと異物なりと雖も、生まれながらに相依附す。

結托して既に同じきを喜ぶ。安くんぞ相語げざるを得んや。

形（肉体）と影よ、なるほど君らと私は異なるが、君らと一体となつて陶淵明という人間存在を構成できたのを喜んでゐる。だから君たちの問答に私（神）も語りかけずにはいられないのだ。

三皇は大聖人なるも、今、復何処に在る。

彭祖は永年を愛せしも、留まらんと欲うも住まり得ず。

老も少も同じく一死、賢愚も復た数うる無し。日々に酔えば或いは能く忘れんも、将、齡いを促すの具に非



すや。

酒は生命をちぢめる物でしかない。ここで神は形の享楽主義を批判する。さらに、善を立つるは常に欣ぶ所なるも、誰か当に汝が為に誉むべけんや。

影の名教主義も否定しざる。では死に対処するのにどうすれば良いのか。

甚だ念えば吾が生を傷らん。正に宜しく運に委ね去るべし。復た独り多く慮ること無かれ。大化の中に縦浪し、喜ばず亦懼れず。応に尽くすべくんば便ち須らく尽くすべし。「大化」の語は『列子』の天端篇に次のように述べている。

人は生まれてより終わりに至るまで、大化四有り。嬰孩なり。少壮なり。老耄なり。死亡なり。

天端篇は明らかに一気として万物を捉える『莊子』大宗師篇の影響が濃厚である。

夫れ大塊（自然）は、我を載するに形を以てし、我を勞しむるに生を以てし、我を佚んずるに老を以てし、我を息わしむる死を以てす。故に吾が生を善くする者は、乃ち吾が死を善くする所以なり。

「神」は次のような、「形」と「影」とへの呼びかけで結ばれている。

復た独り多く慮ること無かれ。

この結びは『莊子』外篇の達生篇が念頭にあったのではないかと筆者は思う。

生の情に達する者は、生の以て為す為す無き所を努めず。命の情に達する者は、知の奈ともする無き所を務めず。形を養うには必ずこれに先ずるに物を以てするも、物に余りありて形の養われざる者これ有り。生を有つには必ず形を離るる无きも、形は離れずして生の亡ぶる者これ有り。生の来たるや却くる能ず。其の去るやや止むる

能わず。悲しい夫。世の人の、形を養えば以て生を存するに足ると以為えるや。而れども形を養うこと果たして以て生を存するに足らず、則ち世奚ぞ為すに足らん。為すに足らずと雖も、而も為さざるべからざる者は、其れ免れずと為す。

生命の情実を見きわめた者は己れの生命を人為的に寿命をのぼそうとすることを努めたりはしない。生命の情を見ぬいた者は自分の知の限界をわきまえているから、限界を超えたところに知を働かすことはしない。肉体を養うにはまず飲食などの物の備えがまず肝要だが、しかしそうした備えをもってしても、肉体がそこなわれることがある。(例えば不治の病や不慮の事故) 生命を有つに肉体を忘れてはならない。しかし肉体の維持に務めても生命を失なう事がある。生命をもって生まれ、その生命が消え去ることは人の力を越えている。なんともあわれなことだ。世間の人は肉体を養いさえすれば生命が保れると考えているが、しかしいくら養生したって、遅かれ早かれ死ぬのだ。だとすれば、人知の限りを尽くして養生することが何とも愚かなことだと分かる。しかし、それでも生命の維持に汲々たらざるを得ない。人間とはまことに愚かな存在なのだ。

陶淵明は自己を、形・影・神に分身させてこの三者を通して自己の死生観を語る。その根底には、今まで述べたように『莊子』の影響が大きい。と同時にその表現型式は、興膳宏氏が指摘されたように、司馬相如(前一七九—前一七)の子虚賦に範を採っている。(『文選』でいえば上林賦まで含む)

楚王は子虚を齊王への使いとして派遣した。齊王は子虚を伴って狩りをした。狩りが終わって、子虚は烏有先生の所に立ち寄って、狩りについて、楚の雲夢の狩場の方が齊のそれよりも勝っていると大言した。その時、烏有先生の処には亡是公も同席していた。ひとしきり雲夢の狩場が广大でそこでの狩の楽しさをとうとうと述べた子虚

に対し、烏有先生が反論した。あなたは誤っている。齊主は境内の兵士をことごとく出し、おびただしい車騎を備えて、あなたと供に狩りをなさった。これはひとえに賓客の礼をもって処遇したのだ。それに対して自国の雲夢の狩場の豪華さを誇るとは無礼も甚しい。齊主が楚王と交誼を深めようという厚情を台無しにしまった。あなたの振る舞いは、必ずや齊国に軽んぜられ、楚国に害をもたらすだろう。

子虚と烏有先生とのやりとりを聞いていた亡是公はにっこり笑いながら発言した。

楚も齊も間違っている。漢の天子は徳をもつて齊楚らの諸侯が職分を尽すように配慮されている。かてて加えて漢の天子の狩場の上林苑の豪華さは、到底齊楚の及ぶべくもない、と。その有り様を縷々説き明かす。そうして漢の天子は上林苑の楽しみを反省し、上林苑を開墾して、全て耕地として人民に分け与え、山沢も人民が利用にと下命する。この亡是公の説に二人（子虚と烏有先生）は感動して亡是公に教えを乞うことで結ぶ。

形Ⅱ子虚、影Ⅱ烏有先生、神Ⅱ亡是公とその役割が符合している。

### 結びにかえて

陶淵明は「形・影・神」三首以後、その詩文の篇々死に言及しないのないうちでも過言ではない。特に「擬挽歌詩」「自祭文」は正面から死を問いつめている。死を問いつめることが生の証であるかのようである。

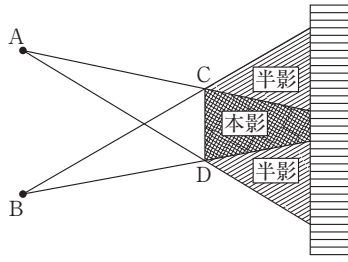
今後、これらの作品を精読して、陶淵明の死生観がどのように展開していったかを究明していきたい。

注

(1) 『墨子』第四一經篇下、第四三經說篇下の經一八を、藪内清は、「影には二つがある。理由は光が重なるからである」と訳し、次のような注を付していられる。

經一八 この文は光が直進する事実、及び影に本影・半影がある事実を指摘したものであるとして、注意されてきた(図参照)。二光A・Bから出た光は、物体C・Dの影を生ずるが、二つの光が交わるC及びDからは半影ができる。なお『莊子』齊物篇には罔両と影との問題があり、この罔両は半影と解されている。(以上、平凡社東洋文庫)

(2) 唯識では諸法のあり方について三種の性質を考える。遍計所執性遍計所執性、円成実性、それに依他起性である。依他起性とは、他によつて起る性質ということであつて、因縁によつて生起するものをいう。それは固定した実体はなく、ただ現象としてあらわれているに過ぎない。(岩波仏教辞典)



図